1.「総合的な学習」に関する研究実践活動

(1) 2001年度「総合的な学習研究会」の研究活動について

初年度（2001 年度）は，**中学校，高等学校の６年間を通した「総合的な学習」のカリキュラムの基本的な構造を明らかにして理論構成を行い**，各学年のテーマ，学習の目標・ねらい，育まれる能力，中・高６カ年における学習の位置づけ，指導上の工夫とポイント，評価の観点を明らかにした**具体的な年間指導計画を作成した**。

二年次の今年度（2001 年度）は，前年度開発をしてきた理論構成と年間指導計画を基にして，昨年度までの**中学校に加えて高等学校においても試行的な実践を始め，実践を通して，各単元計画の中で評価の観点と方法，教科学習とのつながりなどを明らかにしてきた**。そこでは，**教科学習に基盤を置く考え方をより鮮明にしてきた**といえる。

さらに，今年度までの研究成果を世に問う手段の一つとして，また，全国の中学校，高等学校の先生方に実践資料として利用していただくことを願って，**研究内容を整理して本年度末には書籍として出版することとした。**

今年度（2001 年度）における「総合的な学習研究会」の研究活動について整理すると，その内容は主として以下の４点に集約される。

Ⅰ 「総合的な学習研究会」指導委員会実施（4 月 27 日，広島大学本部会議室にて）

［実施計画や資料の作成は，カリキュラム開発委員会（4/2，4/25）で説明・協議・確認］

出席者：指導委員会から，委員長をはじめ 10 名
当校から会長，副会長，カリキュラム開発委員会委員の合計 13 名

内　容：初年度の研究報告（教科学習に基盤に置き，教科と総合のつながりを考えてカリキュラムを構成したこと。）と二年次の研究計画（**単元計画の考え方と評価方法**）の内容について，指導委員の先生方から指導・助言をいただきながら協議した。

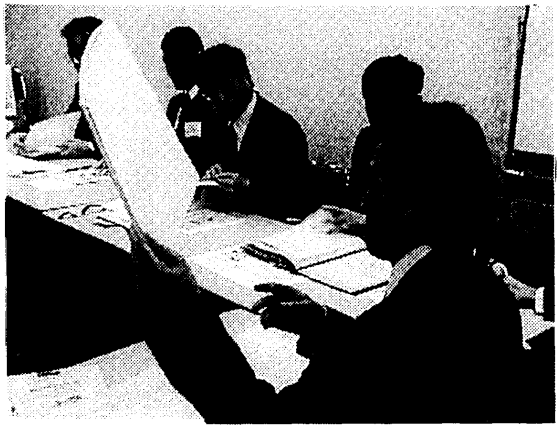
指導委員の先生からの主な助言内容：

a. 総合学習としての学年を追ってのつながりについては，**能力，資質の系統性で考える**と良い。（角屋）

b. 研究体制の開発としてのノウハウがほしい。（小原）

c. **安定した学校運営の中で考える。**
生徒の活動をきちんと評価すること。
学習目標を明確にすること。（長澤）

d. 六年（高校３年）についての扱いを考えること。（永田）



指導委員会

Ⅱ 「総合的な学習」研究推進委員会実施（7 月 14 日，当校会議室にて）

［カリキュラム開発委員会（5/15，5/18，7/2）で，実施計画，作成資料等打ち合わせ］

指導助言者：指導委員会委員長角屋重樹先生

校内出席者：校長，副校長２名，カリキュラム開発委員会委員 25 名

研修内容：　前年度作成できた年間計画に基づいて，新たに**評価の観点と方法や教科とのつながり**についても加えて作成した単元計画の内容およびこれからの検討課題について各小委員会（第１～第５委員会）の委員から説明し，角屋先生から助言，説明をいただいて各委員からの質問や意見の内容を基に協議した。

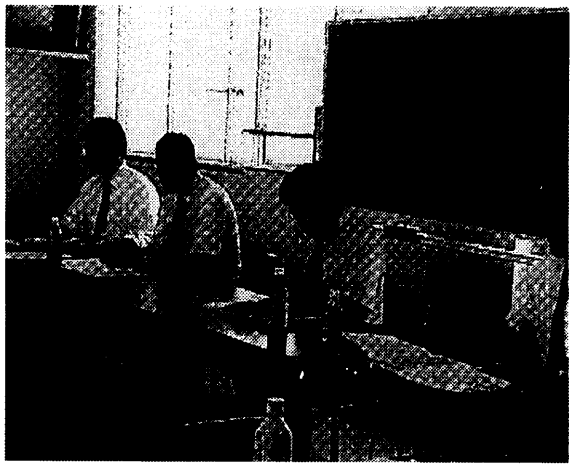
主な助言内容：

a.　評価の問題は，数の問題として**評価項目の数**を減らしてしまうことと，質の問題として，**観点の数**を三つくらいに圧縮してしまうことで考える。

b.　**能力・資質の点から**，教科の目標，学年レベルの目標，分野レベルの目標を詳細に見れば，教科とのつながりが具体的に出てくる。

c.　評価の観点と，教科とのつながりの欄については，書き方に統一した次元をもっていた方がよいと思う。

d.　評価の観点の欄は，誰も手をつけたくないしんどい部分である．レベルの高いところで，評価はこうあったらよいのではないかといったものを提案してよいのではと思う。



研究推進委員会

Ⅲ　第３１回教育研究会実施（9月29日，当校会場）

［カリキュラム開発委員会（5/15，5/18，7/2，9/12），研究部主催校内研修会（5/21，9/20），教科主任会議を通して，研究会実施計画，作成資料について説明・協議・確認］

「総合的な学習」関係では，公開授業，分科会，シンポジウムを実施。

①　**公開授業**：中学校の各学年１クラスに加えて，今年度は，高等学校でも高１で２クラス，高２で１クラスの**中高各３クラス**合計６クラスで実施。

②　**分科会**：　公開授業の内容・主旨，および，**中学校，高等学校を通したカリキュラム案**の考え方について発表と協議。

③　**シンポジウム**：「総合的な学習のカリキュラム開発と評価」をテーマとし，コーディネーターに角屋先生，パネラーに研究者の立場から指導委員会永田先生，他校における実践研究者の立場から兵庫県三木市立星陽中学校藤本先生，保護者の立場から当校教育助成会掛谷会長，当校カリキュラム開発委員会から高地副委員長という構成で実施した。

当校からは，**教科の領域に基盤をおいたカリキュラムの考え方**や，**教科学習とのつながりや評価の観点と方法まで明らかにする具体的単元計画**について提案した。

400 名近い参加者があり，会場からは学習内容や評価の方法についての質問，意見が出された。

分科会

シンポジウム

Ⅳ　書籍出版を企画

年度当初（4月2日）のカリキュラム開発委員会で，今年度は「総合的な学習研究会」による研究活動の成果をまとめて年度末に書籍として出版することを目標としてスタートすることを共通認識し，7月の研究推進委員会と9月の教育研究会を出版原稿作成のためのポイントの機会と位置づけて研究活動を推進してきた。

原稿は，**教科とのつながり**，**評価の観点**にポイントを置いて編集することとした。

10月には出版社を訪問し，出版計画についての打ち合わせをし，本年度末には発行出来るよう進めている。

※　上記文中の指導委員会，カリキュラム開発委員会については，次の組織図を参照。

「総合的な学習研究会」の組織と構成（2001年度）

会　　長	西村清巳　（広島大学附属福山中・高等学校長）
副 会 長	野口寧文　廣澤和雄　（広島大学附属福山中・高等学校副校長）

顧　　問　牟田泰三（広島大学学長）　梶田叡一（京都ノートルダム女子大学学長）
西川恭治（近畿大学教授）　無藤　隆（お茶の水女子大学教授）

指導委員会　［委員長］角屋重樹（教育学部教授）
開發一郎（総合科学部教授）　頼　祺一（文学部教授）　岡東壽隆（教育学部教授）
小原友行（教育学部教授）　曽余田浩史（教育学部講師）　高橋　超（教育学部教授）
利島　保（教育学部教授）　川崎信文（法学部教授）　吹春俊隆（経済学部教授）　松本堯生（理学部教授）
大方勝男（理学部教授）　横山　隆（医学部教授）　木村榮一（医学部教授）　奈良　勲（医学部教授）
赤川安正（歯学部教授）　柴　雅和（工学部教授）　佐藤清隆（生物生産学部教授）
中山修一（国際協力研究科教授）　長澤　武（高等教育研究開発センター教授）　〈以上，広島大学〉
永田忠道（大分大学教育福祉科学部講師）

研究推進委員会　（広島大学附属福山中・高等学校内；以下の◎は委員長，○は副委員長）

「総合的な学習」カリキュラム開発委員会
◎加藤成毅　○高地秀明　小林京子　竹盛浩二　平賀博之　森才三　新福一孝　千菊基司

第一委員会
◎竹盛浩二　入川義克　濱賀哲洋　山下雅文　甲斐章義

第二委員会
◎平賀博之　高橋美与子　丸本浩　三宅幸信

第三委員会
◎森才三　大江和彦　江口修司　金子直樹

第四委員会
◎新福一孝　鵜木毅　清水浩士　村上和男　光田光太郎　江草洋和

第五委員会
◎千菊基司　柄本正勝　山田佳代子　和田文雄　池岡慎　伊藤朱　幸建志

「総合的な学習のひろば」運営委員会
◎高地秀明　○平賀博之　小林京子　江草洋和

会　員　（個人の資格での参加による構成員）

全教官

(2)中学校・高等学校のカリキュラム開発

当校の総合的な学習「ＬＩＦＥ」は何をめざしてきたのか。

「ＬＩＦＥ」の特徴を明らかにすることで，当校が提案している「ＬＩＦＥ」のコンセプトならびに概要を紹介する。

Ｉ．ＬＩＦＥ以前の学習が基盤となって

＜ＬＩＦＥの特徴１：これまでの実践を基盤に開発した総合的な学習＞

生徒の発達段階に応じ，**学び方やものの考え方**を基礎として，**問題解決や探究活動に主体的・創造的**に取り組む態度の育成を図るとともに，**特に高等学校においては自己の生き方についての自覚を深める**ことに重点を置いたカリキュラムである。

当校では以前から自己学習力の育成や学びの拡がりを視野においた多様な学習活動を展開してきた。それは，生徒の選択による課題探究学習，実験実習を多く取り入れた体験的な学習，実際に現地に出かけての野外学習，自然観察，環境学習，社会見学といった内容であるが，学びを拡げ，教科の枠を越えて学びのつながりを求める学習であった。

総合的な学習「ＬＩＦＥ」では，これまでの実践を基に，学習指導要領に示された**「総合的な学習の時間」のねらいを盛り込む**形で，カリキュラムのデザインを行った。全く新たに「総合的な学習」のカリキュラムを開発するのは多くの労力を必要とするが，これまでの実践で蓄積されたノウハウを生かすことで，各学校の実態に合致したオリジナリティー溢れるカリキュラムを創造できるものと考えている。

Ⅱ．教科学習が基盤

＜ＬＩＦＥの特徴２：教科を基盤とする総合的な学習＞

各教科等で身につけられた知識や技能などが**相互に関連づけ**られ，深められ，生徒の中で総合的に働くようにすると同時に，必要に応じて**高い専門性を追求する**内容が盛込まれている。

一般に，「総合的な学習」には教科書もなく，学習内容も規定されていないために，そのとらえ方は様々で，この時間を安易に学校行事や教科の補習補充に当てたり，一過性のイベント的な内容や体験のみを重視する偏った実践事例も少なくない。当校では，**「総合的な学習」と「教科学習」を車の両輪**のような関係と捉え，この二つが相互に有機的なつながりを持ち，学校教育全体の学習活動が活性化されることによって，総体としての教育効果が期待できるプログラムを構成しようとしている。

「総合的な学習」において課題の発見・探究といった自ら学び自ら考える「問題解決能力」の育成や，「自己の生き方」についての自覚を深めるためのカリキュラムを具体的に実現するためには，子どもたちの学習活動において，**それらが発揮・活用される場面や仕組み**をいかに作っていくのかがポイントとなる。例えば，「自分で問題を発見」して「解決を目指して取り組む」ためには，テーマとなる事項を調べ，まとめた上で，その知識を基に判断し，「疑問」を抱くことが出発点とな

る。そのためのテーマとしては，結果が分かりきった内容では興味関心は高まらず，生徒が自ら進んで活動することは望めない。表面的な扱いでは不十分であり，**深い掘り下げが必要になる場合もあ**ると考えられる。

総合的な学習「ＬＩＦＥ」のカリキュラムでは，各教科の学習が基盤となり，各教科で培った力のネットワーク化をはかる**「横断的・総合的」内容**であると同時に，**高い専門性を追求する学習**となるようにカリキュラムのデザインを行っている。高い専門性を提供する基盤は「教科学習」であり，「教科学習」の基盤なくして「総合的な学習」の充実はあり得ない。また，「総合的な学習」の充実によって「教科学習」が深まり充実するという相互効果が生まれることで，**学力につながる「総合的な学習」**を構築できると考えている。

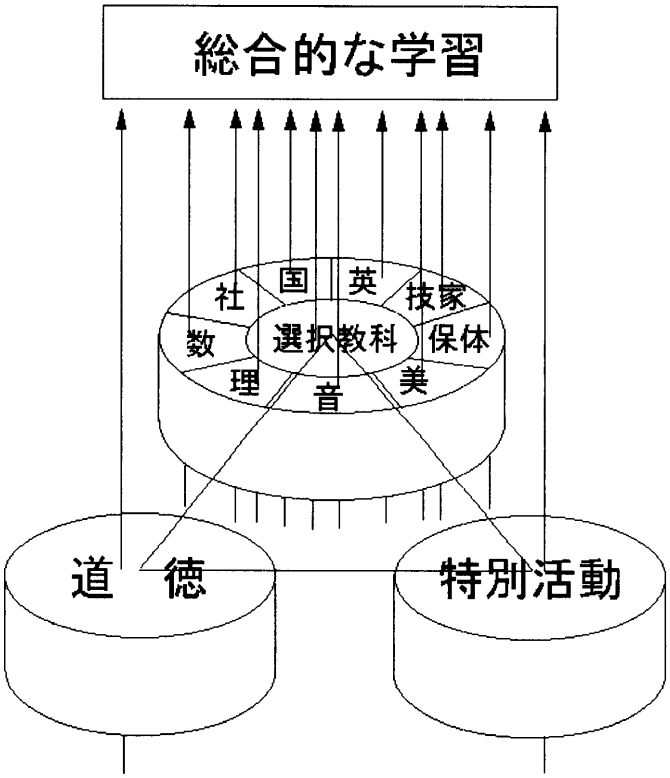


図１「総合的な学習」の位置づけの概念

「総合的な学習」の内容は，教科の領域に基盤をおきながら，特別活動や道徳の内容を包括的に取り込んでいる。

Ⅲ．ＬＩＦＥの学びの意味

＜ＬＩＦＥの特徴３：自己教育力の育成と学びの総合化＞

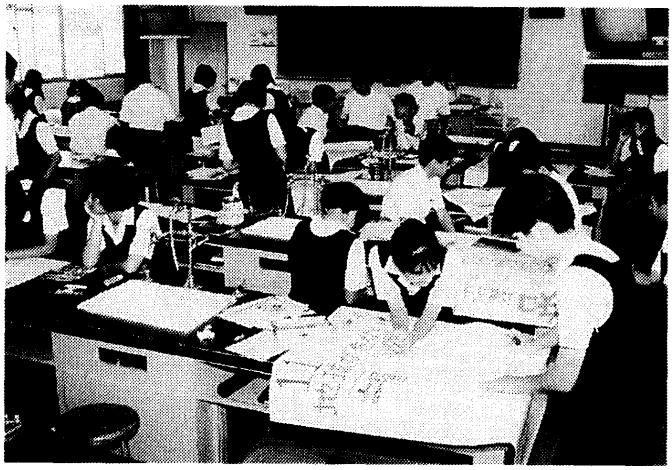
課題の発見・探究，情報分析，問題の解決，まとめと発表・自己表現，コミュニケーション，自己評価といった，「総合的な学習」の**学びの意味**に視点を置いたテーマや単元を配置し，主体的な学びを創造している。

「総合的な学習」ＬＩＦＥでは，知識を与えるだけではなく，これまでの教科学習以上に**体験的な学習**や**課題解決を目指した学習**を中心に構成し，子どもたちが**主体的**，**意欲的**に取り組むことを期待している。また，子どもの学びたい知りたいという欲求や自己を確立しようとする欲求に応え，「知識を受動的に与えられてきた学習」から「新しい知識を**能動的**に見つけだし，自分なりに発信する学習」へと転換を図ることを目指している。

将来にわたって，自分なりの問いを持って能動的に学習活動を繰り広げ，自分が納得できる**自分なりの知の体系**を構成していくことのできる生徒を育てる，そのために「総合的な学習」

ＬＩＦＥが１つの足がかりとなるようにと考えている。

例えば，学習のある場面では，**教科学習で身に付けた知識や技能が横断的・総合的に活用される場面を用意**し，生徒自らの主体的な学びが展開される場面を用意することで，活発な学習が展開されるような仕掛けを作る。知識や技能に重点を置いた「基礎・基本の習得」の部分もあれば，次の場面では，生徒の興味関心を生かした主体的な学習活動に視点を置いた「課題の発見」，「探究」，



「体験」，「問題の解決」などの活動があり，さらには，コミュニケーションやプレゼンテーション能力の育成に視点を置いた「発表や表現」など，多様な学習活動を組み合わせたプログラムが用意されているのである。

このような活動を通して，「自ら課題を発見し，自ら学び・・・」といった「自己教育力」や「問題解決能力」，「課題探究能力」が育成され，「自己の生き方」に対する考えを深めることにつながっていくと考えている。つまり，主体的な学びを創造する場として，総合的な学習「ＬＩＦＥ」の時間を活用しようとするものである。

Ⅳ．系統性と学習の深化

＜ＬＩＦＥの特徴４：発達段階に応じた学習目標と内容の系統性＞

「総合的な学習」ＬＩＦＥにおいての育みたい能力とそれぞれの学年レベルに対応した学習目標を明確化し，**中学校・高等学校６カ年の系統性**を考慮したカリキュラムである。

学習指導要領では，小・中・高等学校でそれぞれに「総合的な学習の時間」が設置され，取り組まれることになっている。「環境」「国際理解」「情報」「福祉・健康」といった内容は，小・中・高の多くの学校で実践され，学ぶ児童・生徒たちにとっては重複した内容を繰り返し学ぶことにもなりかねない。そこで，中・高一貫校である当校では，中学校・高等学校の各学年の**発達段階に応じた学習目標や内容**を明確にし，**６カ年の系統性を考慮**しながら「ＬＩＦＥ」全体の構成を検討した。例えば小学校で同じテーマの総合的な学習を経験した生徒でも，中学生あるいは高校生の発達段階に応じた「目標」を明確にすることで，テーマの重複はあっても**「目標」の重複はあり得ない**と考えられる。

目標を明確にするという観点に立つと，生徒によって学習内容が極端に異なるという「選択制」は避けるべきであると判断した。これまでの実践事例を見ると，例えば「環境・国際理解・福祉」の３テーマから１つのテーマを生徒が選択するといった選択制を取り入れている学校も多く見られる。しかし，この場合テーマ毎に「目標」や「育もうとする力」には違いが生じる。当校の「ＬＩＦＥ」の時間では，探究活動やテーマ設定においては生徒の個性や興味・関心に基づいて自由な設定が行えるものとするが，教育課程としては全生徒が同一の授業を必修で履修するものとし，**選択**

制はとらないものとした。中学校の新教育課程においては，従来以上に選択教科の枠が拡大されている。生徒の個性や興味・関心，あるいは**将来の進路**を見通して選択を行い，授業を受けることが可能となっている。そうした中で「総合的な学習」の選択制の是非を考えたとき，単に子どもの興味・関心や経験を中心として体験的な活動を組織したのでは，ただむやみに動き回るだけの無意味な活動を生み出すだけで，苦労の多い割に「総合的な学習」で育もうとする力をつけることができない危険性があると考えた。「ＬＩＦＥ」では，**育もうとする力を見据えて，教師の目で見通しを持ってテーマや課題を設定し，確実な力**をつけさせたいと考えた。

以上のような特徴を持つ総合的な学習「ＬＩＦＥ」は，生徒たちに「生きる力」を育むことをカリキュラム構成の基本に置き，情報化社会の中での「学び方」の学習を出発点として，自分と自然や社会，環境とのかかわりについての理解，人間や人間の文化についての理解，そして「自己の生き方」に対する自覚を深めることを目指した，中・高六カ年一貫の総合的な学習プログラムである。

具体的なカリキュラムについては次の章で説明するが，カリキュラム開発の第１段階として設計された，６年間のテーマの一覧を次に示す。

第１学年 （中学校１年）	学び方を学ぶ 「情報処理能力と自己表現能力の育成をめざして」
第２学年 （中学校２年）	環境と人間の生き方を学ぶ 「自然と人間，人間と人間の共生をめざして」
第３学年 （中学校３年）	自己の生きる地域と世界について学ぶ 「地域からの世界理解，世界からの地域理解をめざして」
第４学年 （高等学校１年）	人間と人間の文化について学ぶ 「人間の文化や人間についての科学的な理解をめざして」
第５学年 （高等学校２年）	言語の違いを越えて世界を学ぶ 「国際理解や国際協力の深化をめざして」
第６学年 （高等学校３年）	進路と自己の生き方について学ぶ 「未来を切り開いていく態度と自己実現をめざして」

構造としては，図２に示すように，第１学年での学習を基礎に第２学年における活動を積み上げ，学年進行とともに深化した内容を目指している。

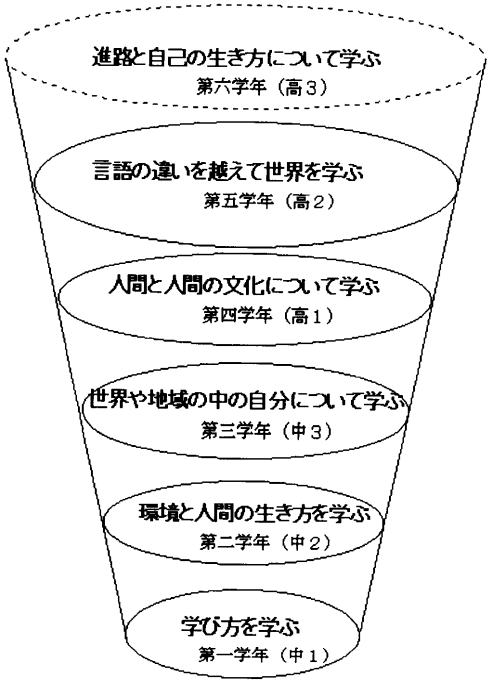


図２「総合的な学習」ＬＩＦＥのカリキュラム構成

第１学年の「学び方を学ぶ」は，調べ方やまとめ方といった学びの基本から出発する。コンピュータやインターネットを活用したＩＴ時代の学びをテーマとしている。第２学年の「環境と人間の生き方を学ぶ」では，環境や健康をテーマに第１学年での学びを生かしながら探究活動を中心に構成している。第３学年の「自己の生きる地域と世界について学ぶ」では，「社会見学旅行」といった行事との連携も図りながら中学校３年間を締めくくる研究論文に取り組む。

第４学年（高等学校１年）の「人間と人間の文化について学ぶ」は，当校の総合的な学習「ＬＩＦＥ」を特徴づけるテーマである。一定の方法に即して体系的に理論化された科学や学問の成果としての「知」と，美的な感性，宗教的な価値観等に焦点を当て，それを人間と文化という関係として生徒の成長の中に位置づけることを試みている。第５学年（高等学校２年）の「言語の違いを越えて世界を学ぶ」は，ただ単に国際交流をすることが目的ではなく，交流相手の文化を肌で感じることが重要な視点となる。こうした目的の国際交流の場では英語を自在に操ることなしには目的は達成できないと考え，できるだけ英語の学習が進んだ高学年で実施することが望ましいと判断した。

「ＬＩＦＥ」を授業の形で時間割表の中に組み込んで実施するのは第５学年までであるが，最終学年となる第６学年（高校３年）では，「進路と自己の生き方について学ぶ」というテーマを設定している。それまでの「ＬＩＦＥ」における学びを生かし，自らの進路について自己形成や人間としてのあり方を見つめながら主体的に判断して未来を切り拓いていく態度を求める。そこに「総合的な学習」ＬＩＦＥの成果が結実するものと期待している。

具体的なカリキュラムの開発に当たっては，学年団や特定の教科に任せるのではなく，学年・教科の枠を越えた開発チームを編成し，多面的な視点から学習内容の創造に当たった。その結果，各教科の教員が協力し，教科・道徳・特別活動といった１つの領域にとどまることなく，各領域の活動を総合化したものとして「ＬＩＦＥ」を構成することができたと考えている。

2.「総合的な学習」LIFEの実践，評価の観点と方法

次項ではこれまでの単元事例の幾つかを以下の視点によってまとめた。

（１）年間の大テーマおよび各単元のねらいや目標を明確にする。
（２）年間の評価の観点を明らかにし，評価の具体的な方法を示す。
（３）単元の題材や活動において，育みたい能力・資質を明確にする。
（４）単元の題材や活動において，指導上の工夫について明らかにする